様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２４０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２７４９

研究課題名（和文）中学生の自己肯定感を高める音痴克服のための歌唱指導教材の開発

研究課題名（英文）Development of Singing Instructional Materials to Overcome Onchi and Enhance Self-Esteem in Junior High School Students

研究代表者
小畑　千尋（OBATA, Chihiro）

文教大学・教育学部・教授

研究者番号：２０３６４６９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、歌唱における生徒自身の内的フィードバック能力（自分自身の音高・音程に関する認知）向上と生徒の心理面に着目し、中学生の自己肯定感を高める音痴克服のための歌唱指導教材の開発を行うことである。中学生を対象とした３年間の縦断的調査からは、中学１年次から２年次にかけて自身を「音痴」だと思う生徒が増加すること、また変声が直接の原因ではないことが明らかとなった。それらの結果を基に作成した教材を用いて実施した検証授業の結果、生徒たちの意識に変化がみられ、教材の有効性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中学生の約５割は自分自身のことを「音痴」だと意識しており、歌うことに自信のない生徒は決して少なくない。本研究により、生徒の３年間の歌唱技能の発達と歌唱に対する意識の変化が明らかとなった。また、開発した指導教材は、音楽科の授業において、自分自身のことを「音痴」だと思っている生徒と「音痴」だと思っていない生徒とが協同的に学ぶ教材としても適していることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aims to develop singing instructional materials for overcoming “onchi” in junior high school students. The focus is on improving students' own internal feedback abilities (their perception of their own pitch and tone) and addressing psychological aspects of singing, so as to boost their self-esteem. A three-year longitudinal study revealed that the number of students who consider themselves “onchi” increases from the first to the second year of junior high school, with voice changes not being the direct cause. The results of a verification class that used teaching materials developed based on these outcomes showed that students' awareness of “onchi” improved, indicating the effectiveness of these teaching materials.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音痴克服　中学生　内的フィードバック　自己肯定感　歌唱指導　教材開発　縦断的研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

一般的に歌唱における音痴は、生まれつきであるかのごとく捉えられている。そして、音痴コンプレックスを持つ成人の多くは、子どもの時から自身を「音痴」だと意識し始めている（小畑 2007 他）。実際、表出された歌声の音高・音程のみに着目しても、内的フィードバック（自分自身の音高・音程に関する認知）ができなければ、自身で正しい音高・音程に修正することは難しく、本質的な解決にはならない。しかし本申請者が開発した内的フィードバックに着目した指導法（特許第 5794507 号）を用いることで、内的フィードバック能力は向上し、自身で正しい音高・音程で歌えるようになり、歌唱行動の変容や歌うことへの自信に繋がる（小畑 2007 他）。さらに、中学生の内的フィードバック能力の獲得が、歌唱活動における積極性、自己肯定感向上に繋がることも明らかとなっている（Obata 2017）。

２．研究の目的

本研究の目的は、歌唱における生徒自身の内的フィードバック能力向上と生徒の心理面に着目し、中学生の自己肯定感を高める音痴克服のための歌唱指導教材の開発を行うことである。具体的には、中学生を対象に、歌唱技能と歌唱に関する意識について３年間の縦断的調査を行う。また、上記の調査結果と、生徒の音痴克服のための指導プログラム（2016-2019 年度 JSPS 科研費 16K04653）を基に、中学生を対象とした「音痴」克服のための歌唱指導教材を開発し、教材の有効性を検証する。

３．研究の方法

(1) 縦断的調査

調査対象は、国立大学附属Ｂ中学校の生徒約 160 名で、質問紙調査と歌唱技能調査を１年次（2019 年５月～６月、11 月）、２年次（2020 年 11 月）、３年次（2021 年 10 月）の計４回実施した。調査は、質問紙調査、歌唱調査の順に行った。音痴意識を中心とした歌唱に関する質問紙調査については、本申請者が開発した音痴意識を問う質問紙調査（Obata 2017）を基に作成し、１年次は紙媒体の質問紙を用い、コロナ禍の２年次以降は Web アンケートフォームを用いた。

歌唱技能調査は、個別に声によるピッチマッチ（本申請者が発声する声と同じ音高、もしくは１オクターブ異なる音高で発声する）を行い、歌唱直後に対象者の内的フィードバックを確認した。調査はすべて２台のビデオカメラで録音・録画した。2020 年度以降の調査、実践については、新型コロナウイルス感染症拡大の状況を鑑み、感染予防に十分に配慮した上で実施した。

声によるピッチマッチと内的フィードバックの評価については、音楽教員経験 20 年以上の２名が採点した。内的フィードバックについては、声によるピッチマッチの３つの課題中、３音すべて音高の正誤が認知できる場合のみを、「内的フィードバックができる」とした。なお、採点者間で評価が異なる対象者については、２名で協議し、評価を確定した。分析は、全４回の調査に参加できた 148 名（男子 74 名、女子 74 名）を対象に行った。

なおここでは、１年次（2019 年 11 月）、２年次（2020 年 11 月）、３年次（2021 年 10 月）の計３回について報告する。

(2) 教材開発と実践による検証

①予備実践：本申請者が既に歌唱指導を実施した中学生の追跡調査後、予備実践として、2021 年２月に国立大学附属Ｂ中学校２年生の中で、特に音痴克服に興味のある生徒 78 名（学年の約半数）を２グループに分け、それぞれ 45 分の講義と実践による授業を実施した。その際、授業前後に Web アンケートフォームを用いた質問紙調査を行い、対象者の意識の変化について分析をした。

②本実践：①の予備実践と、(1)の縦断的調査の結果を踏まえて、中学生の発声（変声を含む）、内的フィードバック、意識等を考慮した内容の教材開発を行った。この教材を用いて、2023 年１月に公立Ｃ中学校２学年全６クラス（生徒 172 名）を対象に、各クラス 45 分の講義と実践で検証した。指導実践前後に、Web アンケートフォームを用いた質問紙調査を実施した。

ここでは、②本実践について報告する。

４．研究成果

(1) 縦断的調査

①音痴意識を中心とした歌唱に関する質問紙調査

・「音痴」意識に関して

質問「あなた自身、自分を『音痴』だと思いますか？」に対して、１年次は 40.5%、２年次は 51.4%、３年次は 50.7%の生徒が、「非常に『音痴』」もしくは、「少々『音痴』」と回答した。

男女別の結果を図１、図２に示す。男子では、「非常に『音痴』」もしくは、「少々『音痴』」と回答した生徒が、１年次から２年次にかけて 44.6%から 56.8%へと増加した。また、両学年間で t 検定を行った結果、有意な差が得られた（$t(73)=2.28$, $p<.05$）。女子も１年次から２年次に

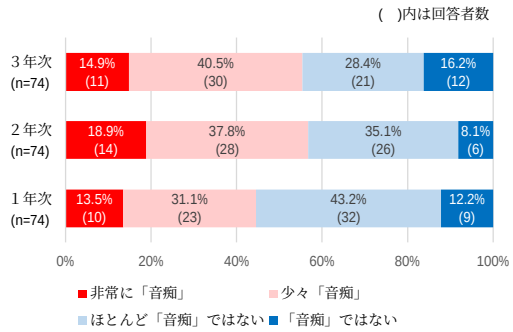

図1　あなた自身、自分を「音痴」だと思いますか（男子）

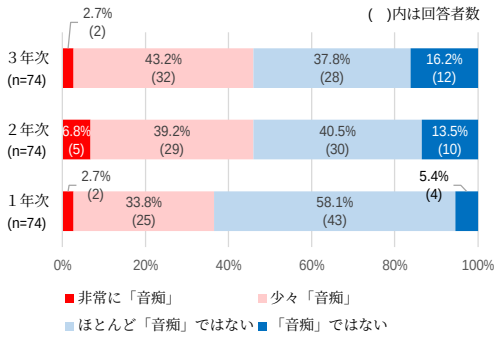

図2　あなた自身、自分を「音痴」だと思いますか（女子）

かけて、36.5%から 45.9%へと増加したが、両学年間で t 検定を行った結果、有意差はみられなかった（t(73)=0.78，p>.05）。

・変声との関連

男子 74 名を対象に変声に関する質問を行った。現在の自身の状況について、「変声期に入っていないと思う」「現在変声中だと思う」「変声期を終えたと思う」「わからない」の中から一つを選択させた。結果を図３に示す。

次に、男子を対象とした変声に関する質問と、本人の「音痴」意識との関連について、「音痴」だと思う生徒が増加した２年次の結果を図４に示す。「変声期に入っていないと思う」と「現在変声中だと思う」との間で t 検定を行った結果、有意差はみられなかった（t(35)=1.47，p>.05）。また、「現在変声中だと思う」と「変声期を終えたと思う」との間にも、有意差はみられず（t(53)=1.59，p>.05）、自分自身を「音痴」だと思う理由と変声との関連は認められなかった。小畑（2023）の研究でも、男子が「音痴」意識を持つ直接の原因として「変声」を理由にすることは妥当ではないことが明らかになったが、本調査でも同様の結果が示された。

②歌唱技能調査

声によるピッチマッチについては、課題の３音とも音高が合わせられた生徒の割合は、男子は、１年次が 74.3%、２年次が 78.4%、３年次が 75.7%であったのに対し、女子は、１年次が 94.6%、２年次が 93.2%、３年次が 89.2%であった。

内的フィードバックについては、３音とも内的フィードバックができた生徒の割合は、男子は、１年次が 81.1%、２年次が 78.4%、３年次が 83.8%、女子は１年次が 97.3%、２年次が 100%、３年次が 93.2%であった。

(2) 教材開発と実践による検証

上記の縦断的調査、予備実践の結果を踏まえて、中学生を対象とした音痴克服のための教材開発を行った。開発した教材は、音痴克服のための理論と実践で構成される。具体的には、まず、「音痴」の語源や「音痴」意識の現状についてデータを用いて理解を促す。次に、音高・音程を合わせて歌うことの仕組みを動画教材も活用しながら解説し、同一音高で歌う、敢えて異なる音高で歌うなど実際に発声しながら内的フィードバックが実感できる活動を行う。その際、中学校歌唱共通教材の《荒城の月》を例に、他者と同じ音高で発声していることを認知できるために、全員で一音ずつ声量を増幅させ、歌唱者自身の内的フィードバックを確認しながら発声させる。

教材の検証は、自分自身を「音痴」だと意識する生徒が増加する学年が２年次であることから、中学２年生を対象とした。2023 年１月に公立Ｃ中学校２学年全６クラス（生徒 172 名）を対象に、各クラス 45 分の検証授業を実施した。実施方法については、公立Ｃ中学校の音楽科教諭と検討を重ね、本申請者と音楽科教諭が各クラスで実践し、各授業前後に、質問紙調査を行った。質問紙調査についても、生徒の実態に即した内容とするために、音楽科教諭と協議、検討を重ねながら作成した。質問紙の有効回答数は 166 名（有効回答率 96.5%）であった。

「今まで、あなた自身が『音痴』であると思ったことはありますか」という質問に対して、「何度もある」に 33.1%（55 名）、「数回ある」に 36.7%（61 名）の生徒が回答した。

「あなたは、自分自身を『音痴』だと思いますか？」の問いでは、「非常に『音痴』」もしくは、「少々『音痴』」と回答した生徒の割合は、本検証授業前は、57.8%（96 名）であったが、授業後は、45.8%（76 名）に減少した。この結果から、自分自身のことを「音痴」だと思う否定的な意識が、「音痴」ではないと思う肯定的な意識に変わったことが分かる。すなわち、自己の歌声についての感情の好転が示唆された。

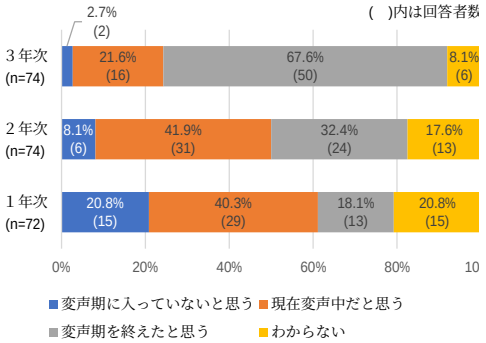

図3　現在変声中であるかどうか（男子）

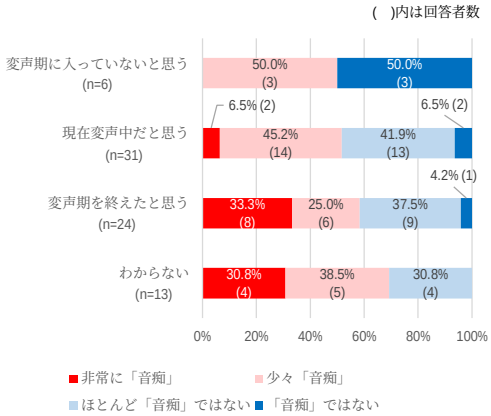

図4　変声期と本人の「音痴」意識との関連（2年次男子）

さらに、「今日の授業を受けて、『音痴』に対するあなたの認識は変わりましたか？」という質問に対して、「大変変わった」に 53.0%（88 名）、「やや変わった」に 41.0%（68 名）が回答し、参加した９割以上の生徒の「音痴」に対する認識が変わったことが明らかとなり、本教材の有効性が示された。同時にこの結果からは、自分自身を「音痴」だと思っている生徒に留まらず、自分を「音痴」だと思っていない生徒、歌うことに対して自信のある生徒の認識にも変化があったことがうかがえる。このことから、本教材が、音楽科の授業において、自分自身のことを「音痴」だと思っている生徒と「音痴」だと思っていない生徒とが協同的に学ぶ教材としても適していると考えられる。

＜引用文献＞

小畑千尋（2007）『「音痴」克服の指導に関する実践的研究』多賀出版

OBATA, Chihiro (2017.7) “Inferiority Complex toward Singing in Japanese Junior High School Students: Analysis by Questionnaire Survey for “Onchi” Consciousness” *The 11th APSMER(Malaka)*

小畑千尋（2023）「小中学生の歌唱における「音痴」意識 学年差・性差に着目して」『発達と教育』（文教大学教育学部発達教育課程編）北樹出版，pp.25-34.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 小畑千尋	４．巻 46
２．論文標題 保育者養成における声の表現に着目した動画制作：互いに表現力を引き出すための多角的アプローチを用いて	５．発行年 2024年
３．雑誌名 生活科学研究（文教大学）	６．最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小畑 千尋	４．巻 52
２．論文標題 重度の聴覚障害学生の歌唱活動における内的フィードバック能力の獲得過程	５．発行年 2022年
３．雑誌名 音楽教育学	６．最初と最後の頁 1～12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20614/jjomer.52.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小畑 千尋	４．巻 55
２．論文標題 中学生の歌唱における「音痴」意識と歌唱技能との関連：性別による分析を中心として	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育学部紀要 = Annual Report of The Faculty of Education	６．最初と最後の頁 123～131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15034/00007943	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小畑千尋・三浦秋司	４．巻 55
２．論文標題 小学校教員養成における音楽科の授業動画制作で培われる資質・能力 ―新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う遠隔授業での附属小との連携による試み―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宮城教育大学紀要	６．最初と最後の頁 161-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐藤恭子・小畑千尋	4．巻 2
2．論文標題 児童の多様な声の表現を促す教員養成課程におけるファシリテーターの育成 ―対話型鑑賞による「聴こえる美術館」の授業実践の分析を通して―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 宮城教育大学教職大学院紀要	6．最初と最後の頁 103-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小畑千尋	4．巻 1
2．論文標題 オンラインによる「音楽科教育法（初等）」での情報保障の実際と課題 ――聴覚障害学生への支援を通して――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 宮城教育大学情報活用能力育成機構研究紀要	6．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小畑千尋・髙木夏奈子・木村升美	4．巻 54
2．論文標題 幼児の表現活動を支える保育者の歌唱に対する認知―保育者養成における「音痴」克服のピアサポート事例の分析を通して―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宮城教育大学紀要	6．最初と最後の頁 267-276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小畑千尋・佐藤恭子・遠藤宏紀・田代七菜美・中島瞳・渡部智喜・玉手英敬・吉村敏之	4．巻 1
2．論文標題 幼小接続を考慮した声の表現に着目した音楽科の授業開発 ―対話型鑑賞による「聴こえる美術館」の授業実践を通して―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 宮城教育大学教職大学院紀要	6．最初と最後の頁 61-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小畑千尋	4．巻 989
2．論文標題 フロントライン教育研究　歌唱における「音痴」克服の指導に関する研究 ― 子供たちの主体的な歌唱活動にむけて ―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 初等教育資料	6．最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Chihiro OBATA
2．発表標題 Overcoming "Onchi" in Junior High School Students: Changes and Development in Students Through Singing Instruction
3．学会等名 2023 APSMER Seoul（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Chihiro OBATA
2．発表標題 Relationship between Inferiority Awareness "Onchi" and Singing Skills of Japanese Junior High School Students
3．学会等名 The 13th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research （国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Chihiro OBATA
2．発表標題 Questionnaire Survey on Singing by Fifth- through Ninth-Graders Students in Japan: Focusing on Inferiority Complex toward “Onchi” Consciousness
3．学会等名 The 12th Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (Macao)（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 C. Victor Fung,Hiromichi Mito, Chihiro Obata, Hiromi Takasu, Nozomi Azechi, Yoko Ogawa, Hiroshi Suga, Yuki Kuwaharada
２．発表標題 Music Participation and Quality of Life of Senior Citizens in Japan
３．学会等名 The 12th Asia-Pacific Symposium for Music Education Research (Macao)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小畑千尋
２．発表標題 小学生・中学生の歌唱における「音痴」意識： 学年差および性差の検討
３．学会等名 日本音楽教育学会第50回全国大会（東京芸術大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤恭子・小畑千尋
２．発表標題 声の表現に着目した授業開発における教員としての資質・能力の育成―対話型鑑賞を用いた教員養成における実践の分析を通して―
３．学会等名 日本音楽教育学会令和元年度東北地区例会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計5件

１．著者名 文教大学教育学部発達教育課程編著，小畑千尋他（分担執筆）	４．発行年 2024年
２．出版社 北樹出版	５．総ページ数 234
３．書名 発達と教育（小中学生の歌唱における「音痴」意識 学年差・性差に着目して（pp.25-34））	

1．著者名 津田正之 ・ 酒井美恵子編著，小畑千尋他（分担執筆）	4．発行年 2020年
2．出版社 明治図書	5．総ページ数 104
3．書名 学びがグーンと充実する！ 小学校音楽 授業プラン＆ワークシート 低学年（担当：「低学年の発声」他pp.24-25，pp.28-30.）	

1．著者名 津田正之 ・ 酒井美恵子編著，小畑千尋他（分担執筆）	4．発行年 2020年
2．出版社 明治図書	5．総ページ数 104
3．書名 学びがグーンと充実する！ 小学校音楽 授業プラン＆ワークシート中学年（担当：「『うさぎ』の日本らしい音楽を味わって歌いましょう」他pp.14-15，p.30.）	

1．著者名 津田正之 ・ 酒井美恵子編著，小畑千尋他（分担執筆）	4．発行年 2020年
2．出版社 明治図書	5．総ページ数 104
3．書名 学びがグーンと充実する！ 小学校音楽 授業プラン＆ワークシート 高学年（担当：「高学年の発声」p.30.）	

1．著者名 齊藤忠彦・菅裕編著， 小畑千尋他（分担執筆）	4．発行年 2019年
2．出版社 教育芸術社	5．総ページ数 253
3．書名 新版　教員養成課程　中学校・高等学校音楽科教育法（担当：歌唱の活動を通して育成する資質・能力pp.36-37）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

教材（マンガ・動画）監修：ベネッセ「進研ゼミチャレンジ4年生」2020年11月号 『わくわく発見BOOK』 「きたぱたがゆく！キミの疑問大調査！　オンチはこく服できるのか」）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関